

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



木版画彫

い 藤 すすむ
伊 藤 進

(昭和63年度作品)

16mm映画・ビデオ
カラー・16分

プロフィール

住所、荒川区荒川4-27-11。

大正5年(1916)、東京生まれ。

12歳のとき、父、忠次郎氏(昭和15年没)について修業し、その後、長島鬼一氏(昭和14年没)に師事し、技術を習得した。

版元からの依頼により、浮世絵版画(歌麿、北斎、広重など)の復刻を行っているが、他に伊東深水、奥村土牛、東山魁夷などの現代版画を手がけることもある。

美人画の毛の生え際——毛割りという——を彫る技術は、集中力を要求されるほどの高度な技術が求められる。また、顔の目や口、鼻など、彫り方一つで表情が変わってしまうので、繊細な神経を使うという。

文部大臣認定の重要民俗文化財選定保存技術保持団体「浮世絵版画彫摺技術保存協会」会員。
現在、荒川区伝統工芸技術保存会副会長。

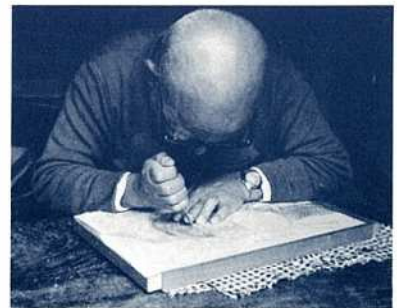
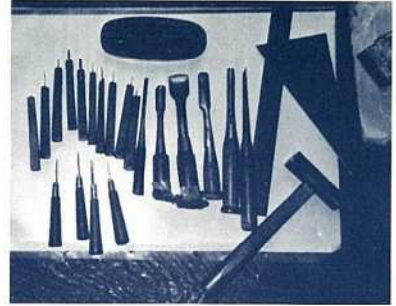
企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

用具・工具

彫刻刀、合鋤、のみ（そうあいのみ、丸のみ）、金槌、とだらい（砥石）、さしがね（定規）、せんぼう、コンパスなど。

工程——美人画「高島お久」（喜多川歌麿の作品）の場合——

- (1) 原画寛政三美人「高島お久」を写真に撮影する。
- (2) 「糊づけ」——版木に糊をすり込み、表面を均一にする。
- (3) 「貼り込み」——撮影したものを薄いフィルムに拡大（原寸大）して版木に貼りつけ、雁皮紙だけを残してはがす。
この作業は、彫師のなかでも熟練した人が行う。
- (4) 墨板を彫る。
雁皮紙にしたがって、墨線だけの版木（墨板）を彫る。
彫小刀・すきのみ・そうあいのみなどを使って、墨線だけを残していく。
顔の部分はとりわけ神経を磨り減らす作業となる。
○「毛割り」——髪が生え際を彫る工程のことで、最も高度な技術が要求される。
- (5) 墨板を摺る（校合摺り）
「色さし」——校合摺りに色を指定する作業。
原画を見ながら色板についての計画をめぐらし、色の区分を行う。これで色板の数が決まる。
ただし、細かい模様などは、和紙を貼りつけて丁寧に写しとる。
※今回の作品では10色の色指定がなされ、5枚の版木を使用した。
- (6) 色板を彫る。一枚ごとに色の指定をした校合摺りを版下として版木に貼り、彫る。
※版技法（今回の場合）
「板ぼかし」——色板のぼかす部分を斜めに削り、とくさでこする。こうすると絵具のつき方にむらができ独特のぼかし効果が得られる。
- (7) 摺師に渡され、摺りが重ねられて一枚の浮世絵が完成する。
※今回の作品は、松崎啓三郎氏（荒川区登録無形文化財保持者）の手によって摺られた。



(彫り)



(歌麿の原画)

利用される方は…………… ☎ 891-4349

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区立荒川図書館で貸し出しています。
貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。